

trivia ■ 皮膚科のトリビア ■ (141)

本欄は、浅井皮膚科クリニックのホームページに連載されている「皮膚科のトリビア」を紹介させていただくものです。学会・研究会などで聞きしたことをその都度まとめ、連載されています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

組織から病原体の検出を一気に行う multi-microbial real-time PCR法

第115回日本皮膚科学会総会から（平成28年6月5日）

細菌68種、真菌9種のプローブ、プライマーを作製し、病理検体からの細菌・真菌の遺伝子を網羅的に検出する系を開発した。ホルマリン固定パラフィン包埋標本から、結核菌、クリプトコッカスなどが検出され、特殊染色や免疫染色で確認できた。凍結サンプルからの検出も可能だった。病原体不明の病理検体から、細菌・真菌を検出する有用な方法で、皮膚科領域の検体にも応用できる。

「変な肉芽腫や膿瘍ではやってみる価値がありそうだ。ただし、まず、組織をみて、感染症を疑うかどうかからスタートすることには変わりはないだろう」。

梅毒はビブラマイシンの 内服治療がよい

第115回日本皮膚科学会総会から（平成28年6月5日）

梅毒のビブラマイシンによる治療を再評価した。ビブラマイシンはこれまでもペニシリンの代替薬として用いられていて、1期では100 mg×2の2～4週、2期では100 mg×2の4～8週の内服が推奨されている。国外の統計によると、血清学的検査(Toluidine Red Unheated Serum Test：TRUST)による

効果判定では、1期では100%が陰性化、2期では97%で陰性化した。

「ビブラマイシンを第一選択にしてもよいくらい有効性が高いとのこと。ちなみにTRUSTはPRPと同様にreaginに対する抗体をみる検査だが、TPHAの値も下がるらしい。今度、ビブラマイシンを梅毒治療に使ってみようと思う」。

皮疹内血による診断

第115回日本皮膚科学会総会から（平成28年6月5日）

皮疹部から採取した血液検体を用いて、診断の一助となる臨床検査を行うという提案。乾癬患者の皮疹内血は、血清中に比べてIL-8の濃度が高かった。また、肥満細胞腫では皮疹内血のヒスタミンが血漿中より高かった。皮膚疾患の病勢を把握する上で、皮疹内血の利用は有用かもしれない。

「水疱性類天疱瘡の水疱内容で抗BP180抗体の存在を確認したり、汗腺嚢腫の内容液でCEA高値を確認したことはあるが、皮疹内血で病態を知るという新しいアプローチで、興味深かった。皮膚生検の際に出血した血液を利用するのがよさそうだ」。

飲酒による固定疹

第115回日本皮膚科学会総会から（平成28年6月5日）

20歳代男性、飲酒後に手掌に紅斑と腫脹

トリビア (trivia) = 3を意味するtriと十道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにもある場所」。そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

浅井俊弥

Asai, Toshiya

浅井皮膚科クリニック

(〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14)

ホームページアドレス：

<http://www.asai-hifuka.com>

を繰り返す。病理組織は固定疹。アルコール類のパッチテスト、プリックテストは陰性だったが、ビールとウォッカのDLSTが陽性。麦などの原材料の特異的IgEは陰性。ビールの内服テストで6時間後に紅斑出現。ノンアルコールビールの内服テストは陰性。日本酒の内服テストでは12時間後に紅斑が出現。原因はアルコールと考えた。
「最近経験する固定疹はムコダインばかりだが、まれにトニックウォーターやイクラなどの日常的な食品でおこることがあるので、いつも患者に尋ねるようにしていた。飲酒も原因になることは記憶に留めておこう」。

FGFR3遺伝子変異による家族性黒色表皮腫

第115回日本皮膚科学会総会から(平成28年6月5日)

発端者は10歳代の女児で、頸部、体幹の褐色色素斑。父と1歳の妹にも同様の病変。母と父方の祖父母には病変なし。肥満や内分泌疾患の合併はなし。症状のある3名でFGFR3のコドン650にLys→Thr変異があり、家族性黒色表皮腫と診断した。

「家族性の黒色表皮腫があるとは知らなかった。皮膚症状以外にも軟骨低形成による軽度の四肢の短縮、低身長と低インスリン血症に伴う高血糖を伴うことがあるらしい」。

無念、5%フェノトリンローション、沖縄のアタマジラミに効かず

第115回日本皮膚科学会総会から(平成28年6月5日)

沖縄のアタマジラミはフェノトリン抵抗性で、市販の0.4%フェノトリン外用薬が無効である。疥癬治療薬として承認された5%フェノトリンローションがこのアタマジラミに有効かどうか確認した。治療前の虫体が32匹、虫卵143個、1回の5%フェノトリンローション外用1週間後には虫体223匹、虫卵84個で、無効だった。その後、欧米で用いられている0.5%イベルメクチンローション(Skllice)の外用1週間後には、虫体0匹、虫卵178個となり、有効だった。

「5%フェノトリンローションがアタマジラミに適応拡大されるといいと思っていたが、残念な結果である。もともとフェノトリン耐性なのでしかたがないか。今後はSklliceの保険収載をめざしてもらいたいと思う」。

